



荒神社(無津)

御陰を焼かれて亡くなり、黄泉の国へ行くことになる。
命は火傷をして苦しみながら「金の神」、「土の神」、「水の神」等を生んだ。これらの神々は冶金、窯業、農業における火の効用を示したもので、火之迦具土神の出現によって生活の基盤を担う重要な恵を授けられた。
荒神社は、古くから無津の氏子により守られており、平成十一年六月鶴崎神社の飛び地境内

神社として合併された。
本殿の老朽化及び覆殿内部の修理のため、改築する事となり平成十八年七月十五日仮殿遷座祭、同八月二十六日本殿遷座祭を執行し、改築工事が完了した。
例祭は毎年十月二十七日に、氏子の当番が参列して執行される。



新調された荒神社本殿(平成18年8月)

荒神信仰

荒神は文献的には古事に「熊野山の荒神」とあるのが初見で、「荒振神」という語が同時に用いられている。
荒神は全国各地に祀られており、その信仰は実に多様化している。
地域的にも著しい違いがあるが、大別す

れば次の三項目が代表的な荒神の性格となる。
①火の神・火伏せの神の性格を持つもの。
②屋外に祀り屋敷神・同族神・地区の神・産土神の性格を持つもの。
③牛馬の守護神
荒神様の祭りは、荒神籠りや荒神講等と称して、それぞれ輪番で頭屋(当屋)を決め正月、五月、九月を中心に荒神を拝みながら夜を明かす「お籠り」が行われていた。一般の神社で行われる祭典というよりは、民間信仰の色合いが強く、人々の生活の中では氏神様より身近で、最も密接な繋がりを持っている。従って、子供が産まれるとまず荒神様へ報告に参拝し、その後氏神様で初宮参りを行っていた。
また、台所に祀る三宝荒神に牛の置物があるのは牛馬の守護神としての信仰からである。
この地方の荒神社の祭礼日は十月二十七日を荒神様の日として、祭りをを行う事が多いが、全国的には荒神様の日は二十八日となっている。
しかし、古来は太陰暦を使用していたので、現在のように一日の始まりは午前〇時からではなく、夕刻から始まっていた。そうすると、二十七日の夕刻から始まる祭りは、二十八日であったとも考えられる。

日本武尊伝説

日本武尊は景行天皇の皇子の一人で、美しい外見とは反対に、生まれ持つ強大な力や、乱暴な気性に周りの者はおろか実の父親(景行天皇)にすら恐れられていた。
尊の力を恐れた天皇はまず尊に旧敵である「出雲一族の討伐」を命じる。この命令の裏には尊の戦死を望む天皇の意図があったが、尊は一人で出雲の地を平定して無事帰還した。

尊が出雲の地に赴いた時、出雲一族の豪傑出雲建兄弟は宴会を催していた。そこで尊は女に化け、出雲建を斬り捨てた。尊は女装すれば、周りにいる本物の女達よりも美しかったほどの美男子であった。

出雲建は尊に殺されるとき、「たける」という一番強い者へのみ許すとされる自分の名を与えた。「日本武尊」という名は、「やまと」の一番強い男という意味で、尊敬と畏怖の念を以て与えられた名前である。

やつと、無事帰還した尊であったが、景行天皇はますます彼を忌み恐れるようになり、尊をねぎらうこともなく、無理難題を与え、「朝廷に従わぬ東の神々を一人で征伐

して来い」と非情な命令を下した。当時、東国は、強豪ひしめくとても危険な地域であったので、尊は父天皇の非情な命令に涙した。

そんな尊を案じ、叔母倭姫命は、素盞鳴命の八俣大蛇から得た天群雲剣を授けた。尊は心をとりのおし、国造りのため、御剣を携え東征へ向かった。

尊の東征は窮地の連続であった。相模の国で、国造に荒ぶる神がいると欺かれた尊は、野中で火攻めに遭ってしまふ。その時に天群雲剣で草を薙いで窮地を脱した。天群雲剣は、草を薙ぎつて災難を逃れたので、その後草薙剣と追銘された。また、相模から上総国に渡る際、走水の海の神に波を起こされ、尊を慕ってついできた妻の弟橘比売も失ってしまう。弟橘比売が、自分の命を犠牲としたとき「あづまはや」と心かはちきれんばかりに泣き叫んだ。そこから、東国を「あづま」と呼ぶようになった。
そんな激闘の東征の中で、尊は尾張の豪族の娘である美夜受比売と出逢う。尊は彼女と結婚の約束をするが、まずは敵を倒してからと、激戦を繰り返し、やつとの想いで、

生還した。犠牲は払ったものの何とか蝦夷を治め、約束通り美夜受比売の元に戻り契りを結んだ。

朝となって、尊は草薙神剣を美夜受比売の枕元に置いて伊吹山の神との闘いに臨んだが、大切な草薙神剣を妻のもとに置いて来た為に、思いがけない魔力に足を煩い、とうとう一歩も動けない体になって死の間際、尊は辞世の歌を詠んで国を偲んだ。
大和は国のまほろばたなづく

青垣やまこもれる大和しうるわし

こうして日本武尊は、孤独にその短い人生を終えが、彼の魂は美しい一羽の白鳥へと姿を変え、大空へ羽ばたいていった。

⑤荒神社(無津)

鎮座地 都窪郡早島町早島六八二

境内地 四四九㎡

祭神 火之迦具土神

祭神の火之迦具土神は、防火の神として信仰の厚い秋葉神社(浜松市天竜区春野町領家)の御祭神である。

古事記によると、伊邪那岐命、伊邪那美命が次々に神を生んで、最後に生み出したのがこの「火の神」であり、伊邪那美命は、そのために